鍛金技法による屋外彫刻「佐々木盛綱像」の制作

ー多機能当て金の開発へ３ー

道具学論集 第28号（2022年度）に発表の原稿

金属造形家　鬼頭正信

画像１：「佐々木盛綱像」（1989年完成時に工房の外で撮影）

１．はじめに

道具学論集第26号に「鍛金技法による純銀阿弥陀如来像の制作」、次に第27号に屋外彫刻の制作例「碧空」を発表したが、それらの発展とも言える「佐々木盛綱像」の制作を紹介する。1989年(平成元年)のことである。

岡山県倉敷市藤戸町の「盛綱橋」が老朽化して更新の計画があり、そこに参加する機会をいただいた。元の橋は1926年(大正15年)に築造されたトラス橋であったが、新しい橋は今の時代の技術をもって景観をも大切にするという計画であった。（注1）

現地は源平合戦の歴史の現場であり、橋の名前に「盛綱橋」という個人名がついている珍しい例である。源氏の武将佐々木盛綱が海を渡って対岸の平氏を攻め先陣の功をあげた地に因み橋の名前になっている。そこの現在は倉敷川となっており、倉敷美観地区から６kmほど下流の場所であるが、その当時は対岸まで２km程の海峡であったそうだ。

そうした歴史の舞台にかかる橋はそれなりの存在でありたい。これもとても嬉しい機会であり、条件はともかく参加したいと決意した。

２．構想を練る

それまでに橋の親柱の上に武将の像を載せるという案があったそうであるが、当然小さなお人形が飾られているような状況となり、景観としては淋しい形となる。

出来れば歴史の舞台にふさわしく、現在は倉敷川となっている嘗ての海の中に、場に相応しい大きさの盛綱の像を置くことを提案した。しかし管理上の事情などから、それは許可されなかった。代わりに橋の上であれば可能とのことであったので、橋の歩道の中程の部分を広げ、像を設置できるようにスペースを確保するよう橋の設計を変更していただいた。

そうした配慮をいただけたことは幸いであったし、納期も橋の完成する次年度にわたる２年がかりという余裕のある話であったので、丁寧な時代考証も行ってレベルの高いものを作ろうと意気込んだ。

像は独立して象徴性を高め、四つの親柱には合戦絵巻風の打ち出しレリーフを配置し、橋全体が歴史を偲ぶ場となるようデザインした。また、台座は像を見上げるような形が一般的であるが、この場面は渡海の姿であり、あえて低めにすることで海面の表情も見えるようにし

た。当然、像の位置も低くなるため鑑賞者が像本体や馬・武具などに触れることが可能となり、傷むのではないかという心配もされたが、触れたぐらいで壊れる物ではないし、むしろ間近に観て頂けることで親近感を持って頂ける方が良いと考えた。

歴史上の一場面であり、時代考証は特に重要である。

先ずは現地で史実に基づきながら調査を行うが、伝来の諸々がかなり有り、惑わされる。正確な時代考証をするため、岡山県立博物館を訪ねた。博物館では専門家の臼井洋輔先生から親切に丁寧なご説明をいただくことができた。さらに、その頃はまだ国宝指定されていなかった大鎧「赤韋威鎧 兜」の実物をじっくりと拝見させていただくこともできた。(注2)

日本甲冑武具研究保存会 という一般社団法人もあり、研究者の立派な著作物も多く出版されていたので、資料は豊富にあったが、何よりも当時の大鎧の実物を見せていただけたのは幸運であった。

この鎧兜のおかげで迷わぬ手本を得られたのだ。せっかく信頼できる資料を拝見したのであるから、可能な限り当時の様式に基づいて作ろう、と決意。出来れば鎧の基本的な構造の威も実物のように札を威して組み上げたい、とまで気持ちは高まった。

イメージを具体化し、必要な資料を収集整理し、構想をまとめる。

3．制作計画を立てる

ところが秋口になって「納期は今年度内」という大きな変更が入り、とても困惑した。(注3)

ゆっくりどころか大急ぎで始めなくては間に合わない。急いでも納まるのだろうかレベルの高さどころか完成できるのであろうか。

今回も優秀な後輩たちに手伝ってもらうが、いつも以上に頼まねば間に合わない。それも膨大な作業量を要するので制作方法自体も考え直さなくてはならない。作品のつもりだが製造業の効率的な手法も取り入れなければ間に合わないだろう。

突然の報に計画を見直すもののかなりの無理がある。嘆いていても解決しないので、この条件下で可能なベストを尽くそう、と決意、計画を見直す。

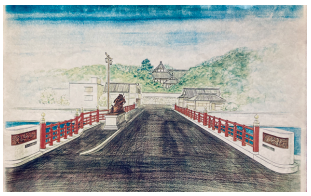
鎧兜の類は好きな物の内にあり、あちこちで展示物も見てきたので知っていると思っていたが、いざ、作るとなって、自分の知識の無さを実感することになった。鎧兜の見えない部分の構造を明確には解っていないことを思い知った。幸いそれらの資料や書物はたくさんあり、確認することはできた。

他にもその時代の武具や馬具の諸々や日本の在来馬の特徴など調べるべきことが多くて時間は過ぎるばかり。冬に近づいても足らないことも多々あるが、作り始めないと間に合わないので、とにかく原型を作り始める。

この場合の原型は完成形を作るのではなく、全体のバランスを決めることとスムーズな制作を進めるための基本構成の模型であり縮尺は２分の１とする。また、作る上で邪魔になる鎧兜や部品類は別とする。

大きく分けて盛綱本体、馬、海となる。盛綱本体は鎧兜や武具類を備えるが、先ず全体の中の馬と人体としての構成を明確にする。馬も重要であるが主役の盛綱を活かすためになるべく目立たないように自然でありたい。海を渡るという場面であり、馬に詳しい方に教えを乞い、その場面にふさわしい馬の姿勢とした。浅瀬とはいえ馬は海水を嫌って耳を後方へ向け、首を上げながら躊躇うであろう。盛綱はその馬に鞭を当てながら進もうと前傾気味の姿勢となろう。密かに攻め込むため波立ちを荒げないよう進んだであろう。全ては想像するしかないが、なるべく自然な形を考えてみた。

人体との接合部である鞍はほとんど隠れてしまう物であるが、ここを丁寧にに作らないと全体に影響する。盛綱の胴体も隠れてしまうが、微妙な体勢などが全体を支配するので重要である。


画像２：修景計画図

画像３：制作用模型

制作計画は形状に基づいて立てるが、それを実行する人材が重要である。このような大型作品は自分一人では作れないのでいつものように後輩達に助けを求めるが、短納期で実現するには人数も必要だ。いつもの方法では間に合わない。あちこちに尋ねて人材確保を諮るが、鍛金という特殊な制作法なので、誰でもいいとはいかない。幸いなことに、後輩の一人が自身の後輩を誘って参加してくれた。近所のアパートに住んでもらい、常勤として朝早くから夜遅くまで手伝ってもらった。もちろん他に多くの後輩達に手伝ってもらったが、彼の働きに助けられたのは幸いだった。

この作品では、鎧兜や武具馬具といった付属品が多い。それらは個々に魅力的な構造や形状をしていて、ゆっくり丁寧に作りたい物だ。しかし、複雑で手間のかかる物が多い。どこまで正確に出来るだろうか。

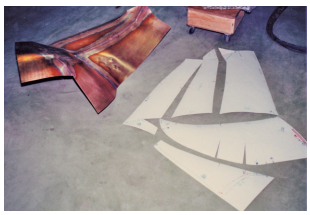
これらの付属品は資料を基になるべく忠実に銅という素材に置き換える、と割り切る。とはいえ、鎧兜の形状も飾る形ではなく、その場面での形状であらねばならない。手綱ひとつにしても同様である。

4. 制作を開始

納期を前倒しされたので、不明な詳細部は調べながら作ることにし、原型を基に大きな部分から作り始めることにする。工房全体を整理し作業環境を整える。

先ず馬から作り始めることとし、原型からその型紙を作り、銅板を切り出す。この作品の場合も銅の展延性を活かした鍛金の絞り技法を多く用いるので、精密な形ではなく、絞り成形を前提とした形である。ただし効率も上げねばならないので、部所によってはスリットを配した地金取りをする。

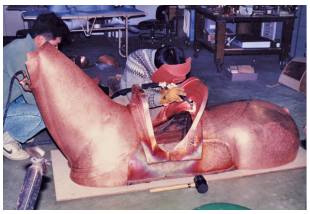
切り出した銅板にある程度成形を加えながら溶接して立体にしていく。その後鍛金の手法で求める形状に成形していく。制作は一般的な鍛金技法と同様に、成形加工して硬化する度に焼き鈍しと酸洗を行う必要があり、この作業がかなり時間を消費してしまう。それらの作業をスタッフたちが行ってくれるのでとても助かる。

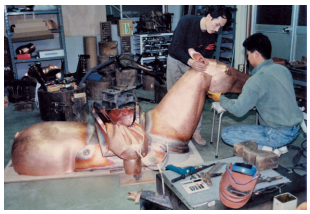

画像４：型紙と溶接状況

画像５：バランスなど検討

画像６：接合など検討

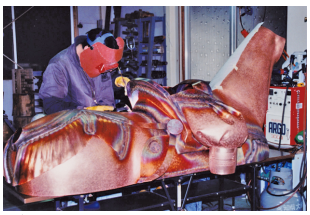
画像７：溶接後の成形


画像８：鞍を溶接

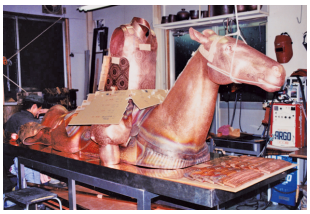

画像９：バランスを検討

制作をスムーズに進めるために作業台も専用を作るようにしているが、今回は可能な物は外注することとし、ベースの骨組みと作業用台車を外注とする。初期の作業時は小さな作業台の方が扱いやすいので、その時期は仮の作業用台車で仮組みなどを行う。

画像10：胴の接合検討


画像11：溶接組み立て状況

人体は頭部を前後の二つに分けて絞り成形し、胴は鎧をつける前提の形状として溶接を主に作る。腕と脚は、ある程度人馬の構成が決まる頃として後にする。

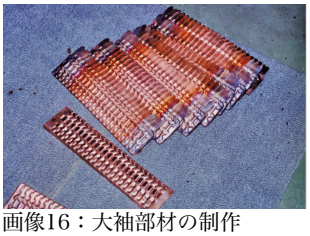

画像12：鎧の組み方の検討

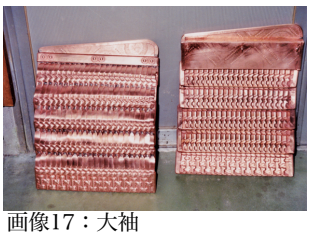
画像13：頭部バランスの検討

本体は大きさとしての大変さがあるが、それ以上に鎧兜や武具馬具などの部品類はその種類の多さが問題である。部品類は独立した物として同時進行させていく。これらは資料を基に作っていくが、組み付ける場所の状況を考えながら作らねばならない。接合すると手や道具が届かなくなり、修正出来なくなる部分も多い。そんなところはその段階で仕上げておく。単にそれらの形状を金属で作るだけでも時間を要するが、最終的に確実に組み立てられるよう丁寧に作る。

画像14：兜の組み方の検討

画像15：鎧の前と後ろ検討


画像16：大袖部材の制作


画像17：大袖

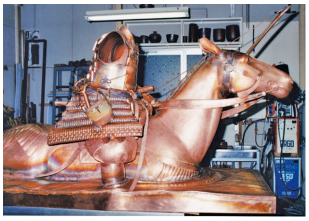
画像18：籠手を付けた左腕

画像19：各種部材の制作

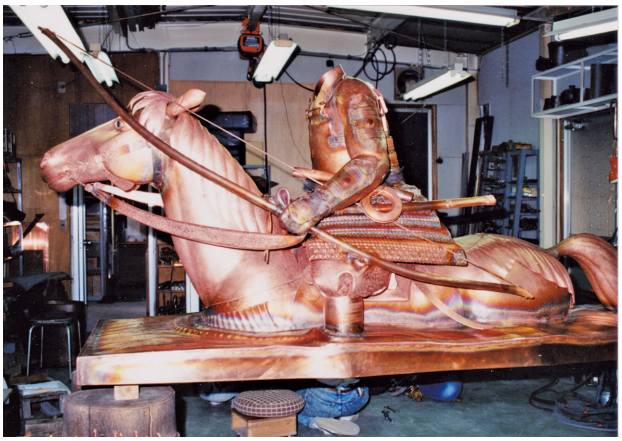
画像20：太刀・脇差

新しい作品を作る時、それのための原型や治具を作ることは当然であるが、新たに作った道具や工夫はその後も有効なことが多い。この頃はすでにソケット式当て金の試作品を多種作ってあったのでその効果を確認するにも良い機会となった。

画像21：鎧の胴との添い検討


画像22：武具の組み付け状況

諸々を並行して作りながら組み立ても進める。武具などは複雑に関わり合っているので、最終的に無理なく組み立つように慎重に行なわなくてはならない。


画像23：武具の組み付け状況（左側）

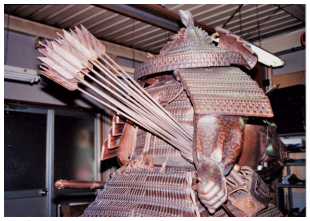
5．完成

組み上げたら全体を再点検する。その後全体を清浄に洗い、軽く硫化させて色調を整える。設置後はその環境に馴染んで変化していくのが良いと思っているが、披露される時に派手な銅色では落ち着きがない。硫黄で少し変色させることで穏やかにする。

画像24：硫化発色させた完成像

画像25：完成像の頭部

画像26：完成像の胸部


画像27：完成像の背側

画像28：完成像の左側部分

画像29：右前側から見た完成像

画像30：上方から見た完成像

6．設置・開通式

設置場所の基礎工事や台座石は外注部分であるため、業者との打ち合わせは早い時期に行っておいた。像の設置も担当業者によってスムーズに行われた。

画像31： 完成時の盛綱橋（天城方面を望む）

親柱に配置した合戦のレリーフは計画したように橋全体の雰囲気を整えてくれた。訪れた人がその歴史に思いを馳せてくれるであろう。

画像32：源氏側のレリーフⅠ

画像33：源氏側のレリーフⅡ

画像34：平氏側のレリーフⅠ

画像35：平氏側のレリーフⅡ

画像36：レリーフの部分Ⅰ

画像37：レリーフの部分Ⅱ

1989年(平成元年)10月14日、開通式が行われ、地元の人々や子供たちなど約千人が渡り初めをした。

画像38：子供たちの渡り初め

画像39：渡り初めパレード

7．その後の盛綱像

現地では「盛綱橋を守る会」という方々が周囲の清掃などもして見守ってくれている。その中のお一人の藤戸史跡保存会の石丸秀子氏が最近の盛綱像の姿を撮影してくださった（右ページの画像44）。美しい緑青が覆い始めて風格を醸してきた様子が嬉しい。（注4）

また、公益社団法人全国乗馬倶楽部振興協会の山口洋史氏は全国の騎馬像を取材して「日本の騎馬像」という本を2019年に上梓された方であるが、「盛綱像」も加えてくださった。盛綱像を深くご覧いただき、その詳細を書いてくださった。ご専門の馬については勿論の事、盛綱の衣装や鎧兜、ほとんど見えない和鞍まで丁寧にご覧いただいた上で書いてくださった。特に盛綱の衣装の形状表現を「優雅」と評してくださったことなどとても光栄である。掲載内容の引用をご了承いただいているのであるが、紙面の都合上、抜粋で失礼する。（注5）

画像40：26年を経た佐々木盛綱像　山口洋史氏撮影（注5）

また、岡山学院大学・岡山短期大学教授の尾崎 聡氏は「“佐々木盛綱像”から学ぶ源平合戦の歴史と風俗」という丁寧な紹介文を書いてくださった。「この像の時代考証はとても本格的で素晴らしい」「とても良い教材」などの評価をいただき、大鎧の実に詳細な説明に加え、「鍛金技法で作られていることにより細かいところまで再現できている」という事にまで言及していただいた。抜粋で失礼するが（注6）に掲載する。

いつか必ず観る目のある方が見てくれるはず、と思って精一杯の努力はしたつもりだが、これらの方々にご覧いただき、とても嬉しい。

8．まとめ

無謀な納期のとても大変な仕事であったが、後輩たちがとても良く働いてくれたお陰でどうにか完成させることが出来た。また、毎日付き合ってくれたS君は確実に技を高めた。教育現場とは違う現実の場での体験はとても大きな成長を生む。彼らにとって教科書的な範囲を超えた実際を体験出来る貴重な機会でもある。

鍛金は絞り技法が特徴的であるが溶接を活用することでこのように大型の作品を作ることも可能である。その場合でも随所に鍛金の技法を活用して表現を豊かにすることが出来る。故に有効な当て金が望ましく、多機能な当て金を開発する所以でもある。

この作例では多種多様な部品類を制作したので、それまでとは別の道具が多種必要で多機能当て金の開発へ繋がるいくつものヒントも得た。

9．おわりに

幸い、高評価をいただき、翌年の熊本県田原坂の作品依頼へとつながった。

これからもその存在によって人々に豊かな想いを呼び起こすような作品を創りたい。それこそ造形活動のもつ大切な役割のひとつと思う。

＜注＞

注1)　付近一帯は国の「ふるさとの川」モデル事業に指定され、「にぎわいと歴史ゾーン」として県、倉敷市が整備を進めていた。

注2)　大鎧「赤韋威鎧 兜、大袖付
（あかかわおどしよろい かぶと おおそで つき）」
平成11年6月7日国宝指定　岡山県立博物館所蔵
胴高約40cm(前)、約44cm(後)、草摺高 約27.0cm、
兜鉢高約13.3cm。
平安時代後期の特色が強く、当初の姿をそのまま伝えており、豪壮な趣を有する極めて 貴重な甲冑。
兜は鎌倉時代の様式。備中国の赤木家に伝来。

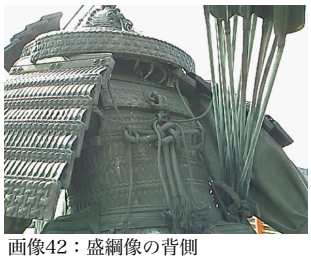
注3)　納期の変更の理由は平成元年４月から消費税がかかるため、3月中に納めるように、とのことであった、、、
そのような理由で納期を縮めるとは理不尽な、、、と嘆いたが、作りたいので受け入れるしかない。

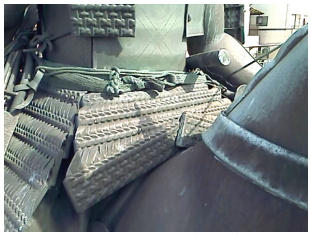
注4)　画像44：32年を経た佐々木盛綱像
藤戸史跡保存会・盛綱橋を守る会 石丸秀子氏
2021年(令和３年)9月29日撮影
金属の色は自然界で安定しようと変化する。銅が緑青に覆われていくのは緑青によって内部を護ろうとする自然の作用であり、環境の良い証でもある。屋外作品は長い年月の内にその環境の自然な色に落ち着いていく。

注5)　画像40：26年を経た佐々木盛綱像
公益社団法人全国乗馬倶楽部振興協会 山口洋史氏
2015年(平成27年)4月11日撮影
（以下は「日本の騎馬像」の記事より抜粋掲載）
「馬は頸が長くて馬体に幅もあり、肉付きがいい。 特に、肩の周辺の肉付き、また大きく盛り上がった腰の筋肉は並みの馬のそれではない。水の中を歩いているため鼻先を上げて正面を見て、盛綱も同じく必死の形相で正面を睨んでいて、地元の漁師に教えられた浅瀬を必死になって進んでいる。 そして、その眼は先陣を切って海を渡り、手柄を立てて立身出世することを夢見ているようだ。
ハミや手綱が正確に、また盛綱の衣装、 鎧 兜、 矢なども非常に精密に作られている。 特に右腕の衣装の柔らかな膨らみとへこみは、他の騎馬像では見られないほど優雅な曲線を描いている。さらには、鎧の下で見づらい位置の和鞍も正確に作り込まれている。 尾は太くて逞しく、尾離れもよく、水の流れに乗って後方に流れている雰囲気が伝わってくる。」

注6)　画像41・42・43：22年を経た佐々木盛綱像の部分
岡山学院大学・岡山短期大学教授の尾崎 聡氏
2011年(平成23年)撮影
（尾崎 聡氏のメッセージより、以下に抜粋掲載）
「この像の時代考証はとても本格的で素晴らしいので‥‥とても良い教材になると思います。
‥‥鍛金という手法‥‥‥鎌倉武士の甲冑姿が実に細かいところまで再現できています。‥‥観察すれば兜・鎧だけでなく、馬具、太刀、弓・矢・矢じりにいたるまで‥‥‥それらの中でも鎧について紹介‥‥‥
‥‥鎧は大鎧といって、平安中期～鎌倉時代の身分の高い武将が着用した最高級の鎧です。部品のひとつひとつが一種の工芸作品‥‥‥
‥‥盛綱像は間近に親しむことができます。‥‥胸の『鳩尾板』『栴檀の板』‥‥‥
‥‥鎧の背中部分は編んだ札がむき出しになっています。大鎧の正面はこれらの構造が皮で隠されているのです。ちなみに盛綱像は皮の文様まで再現されています。‥‥‥背中に結ばれた『揚げ巻き』と呼ばれる太い飾り紐と大袖は細い紐で連結されています。‥‥‥
腰から下を守るのは『草摺』です。草摺の前と後は馬にまたがるとき邪魔になるので真ん中から割れるようになっています。これも大鎧の大きな特徴です。盛綱像には‥‥たくさんの見所があります。‥‥‥」

画像41：盛綱像の胸部


画像42：盛綱像の背側


画像43：大鎧の草摺（前側）

「“佐々木盛綱像”から学ぶ源平合戦の歴史と風俗」
『郷土愛と社会教育』第10回（2011年）
倉敷市立天城小学校区「青少年を育てる会」会報より

画像44：32年を経た佐々木盛綱像　石丸秀子氏撮影（注4）

＜材質寸法など＞
本体材質：銅　（重量：約400kg）
（重量は計量ではなく、記録からの推測）
本体寸法：高さ1.6m、幅3.1m、奥行き1.05m
台座石寸法：高さ1m、幅3m、奥行き1m

＜所在地＞
岡山県倉敷市藤戸町の藤戸地区と天城地区の間の
倉敷川に架かる「盛綱橋」上（橋長：45m）

＜参考文献＞
多くの研究が発表されているが１件のみ下記する。
笹間良彦『日本甲冑大圖鑑』柏書房 1988年